「ヘイオーツ」のヘイベーラによる梱包作業
春播きで10a当たり乾草1tonを生産。

判断しています。

ま と め

エンバクを利用した乾草調製については，既に本誌第29巻•第8号で『エンバク（ハヤテ）の立ち毛乾草で10a当たり1t生産』を静岡畜試の向山先生が発表されております。

「ハヤテ」と「ヘイオーツ」の使いわけが問題となりますが，エンバクはある程度まではどのような利用も行える広汎な利用特性を備えており，播種期•作付期間等が具体的に規定されてはじめて，品種選択が重要な意味を持ってくると思います。

「ハヤテ」は8月下旬〜9月上旬播種で，極早生の特性——10月出穂→乳・糊熟期到達——が期待され，12月のホールクロップサイレージ利用または1〜2月の立ち毛乾草利用において他品種の追随を許さない優れた特性と収量性を発揮します。

「ヘイオーツ」は10月播き翌春(5月)乾草利用，あるいは3月中旬播き梅雨入り前の乾草利用で他品種と異なるグラスタイプの特性が発揮され，イタリアンライグラス早生品種と比較しても乾物生産・栄養生産性で優れ，良質乾牧草の生産に最も適した品種と位置づけることができます。夏作の中心がF_1トウモロコシとなり年々播種期も早まっています。そのような状況のもとでは，冬作のF_1トウモロコシへの影響も考慮する必要があり，エンバクの良さが更に浮び上ってきます。

今後の検討課題としては，東北・高冷地における春播き利用，混播草地あるいはアルファルファ草地造成時の保護作物または雑草抑制作物としての活用なども考えられ，各々の立地条件の下で「ヘイオーツ」が大きく羽ばたき，飼料生産の場で真に役立てていただけることを願ってやみません。

気楽に作れる野菜のポット栽培

—冬の室内で軟弱野菜—

雪印種苗㈱中央研究農場　江 川 大 洋

北海道の冬は長く，雪に閉ざされた日々が続き，外では野菜が作れなくなり，家庭で使うちょっとした野菜でもスーパーや八百屋から買ってこなければならなくなります。そこで室内でポットを使っての野菜作りをご紹介いたします。

ポットといっても，容器はなんでも良いわけです。図1に示すとおり八百屋・魚屋などで見かける発泡スチロールの箱でも良いし，草花が植えられていたガーデンプランター，または使い古しのバケツやおけなどでもかまいません。

さて，容器の準備ができたら，それではどんな野菜を作ったらよいのかということになります。もっとも作りやすい野菜を2,3紹介したいと思います。

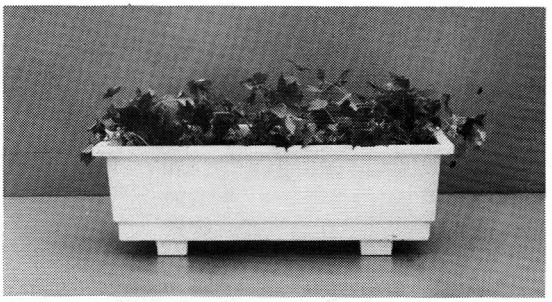
1　パセリー，ミツバ

パセリー，ミツバは根株があれば室内でプランターなどを利用して簡単に栽培出来ます。

図1　容器のいろいろ

時期は，10月中旬から11月上旬が適期です。生育が止まり根株が充実するころ，株を掘り取り，ミツバは良く土を落とし4～5株まとめて10～15cmの間隔をおいて植え込みます。またパセリーはゴボウ根が長いので10cmくらいに切り詰め消毒のため石灰をつけて1個所3～4本かためて植え込みます。

植込み後は，2週間置きに，粒状の化成肥料を一つまみ施すか，ハイポネックス等の液肥の4～500倍液を灌水の代わりに施して下さい。またパセリーは，凍らぬ暖かい日当りの良い場所におき，ミツバは軟白して白茎にするのならば図2のように古バケツや植木鉢を利用して日光の当らない暗所におきます。青々としたまま利用するのであれば，パセリーと同様でよろしいです。灌水は適宜していただきますが，冬の北海道はとかく室内は乾燥しがちですので，土の状態を見て，余り乾燥しないうちに灌水にするよう心掛けて下さい。灌水については他の種類と同様です。生育が進んで参りましたら新葉を摘んで利用します。



プランターにミツバの根株を植え，
冬期間生育させながら食べます。

2　二十日大根

二十日大根は，夏期間であれば播種して20日間くらいで収穫できますが，冬期間には生育日数70～90日を要します。やや面積の広いプランターなどで簡単に栽培します。播種は，6～10cm間隔の条まきにし(図3)，覆土は1cm前後として，十分灌水した後に，ビニールか、新聞紙で覆って下さい。これは発芽までの乾燥防止と，保温のためで，発芽したら，すぐに取りはずす。発芽後5～6cmの間隔に間引をします。間引は遅れますと徒長しますから早めに行なって下さい。その後，大根が十分大きくなるまでは夜間，保温のためにビニールか，新聞紙をかけて，朝とりはずすようにすると生育が促進されます。

1か月おきくらいに播種すると，冬期間，二十日大根の新鮮な味を長期にわたって楽しむことがで

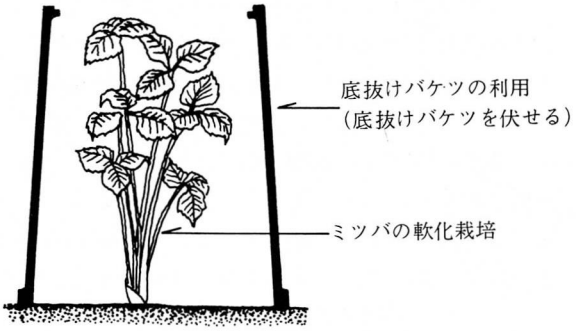


図2　ミツバの軟化栽培法

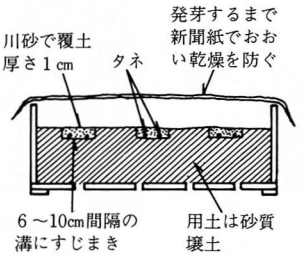
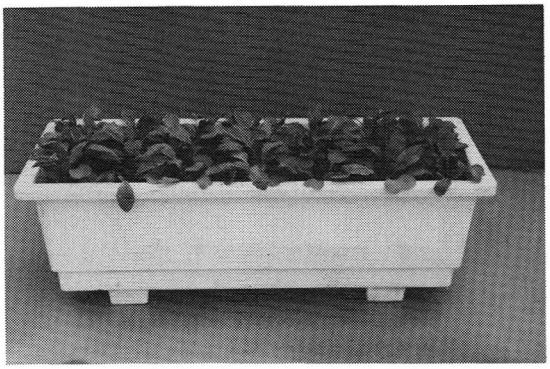


図3　二十日大根の播き方



二十日大根（もうすぐ食べられます）

き，ビタミンの補給にもなります。

3　シュンギク

シュンギクは低温に比較的強い作物ですが，冬期間の室内栽培（15～20℃）では，60 日から 80 日ぐらいで収穫できます。播種は，10 cm 間隔の条まきでも良いし，全面にバラ播きしても結構です。種子を一昼夜水に浸漬し，種子がくっつかない程度に乾かして播くと発芽が早まります。シュンギクは播種後に覆土して灌水することは好ましくなく，あらかじめ土を十分に湿らして播種することがポイントです。また，シュンギクは，発芽に光を要する好光性種子ですから，覆土はできるだけ薄く，種子がかくれる程度にしておいて下さい。その後発芽するまで，二十日大根と同様にビニールか，新聞紙をかけて覆っておきます。間引きは，1 回目は早めに混んでいる所を，子葉が重ならない程度に 1～2 cm 間隔に行い，2 回目に，間引き収穫をしながら株間 5 cm 前後にします。収穫は草丈 15 cm ぐらいのときが最適で，このとき根を切って一度に収穫しても良いし，また，1 株おきに収穫して株間を広げ，残った株を，本葉 5～6 枚のところで

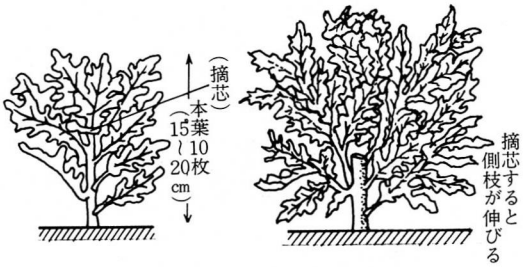
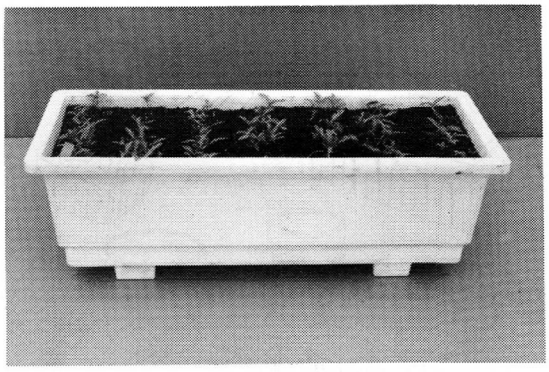


図4　シュンギクの摘芯と側枝



シュンギクが発芽して 1 週間目の状況

表 1　鉢植え、プランター栽培向きの肥料

	肥料名	成分量 チッ素	リン酸	カリ	使用法
緩効性肥料	固形肥料	6	4	3	5 号鉢2個　10号鉢4個程度
	マグアンプK	6	40	5	小型プランターで10～20 g
液肥	ハイポネックス	6.5	6.0	19.0	1,000～3,000倍液を 7～10 日おきに散布
	ローンフラワー	10	5	8	800倍液
	プラントフッド	12	12	16	5,000倍液

摘芯しますと側枝が次々と伸び長期間にわたり収穫できます。（図 4）

以上 4 種類の野菜をとり上げてみましたが，このほかに，ツケナ類などもバラ播き栽培で極めて簡単であり，50～60 日の生育日数で収穫できますから，ぜひお試しいただきたい。

栽培管理については，どの作物もほぼ同じく，まずポットに使う土は，畑や庭土を 4～8 mm 目の篩でふるい分け，水はけが良いように，粗い土をポットの下に 1/5 ほど敷き，その上にふるった細かい土を入れます。肥料は普通のもので良いですが，表 1 に示す緩効性肥料を基肥に使用し，野菜の生育をみながら追肥として液肥を使うのも一方法です。灌水には，土の表面が白く乾いてきたら，汲み置きの水か，ぬるま湯をタップリやるようにします。また冬期間の栽培ですから，夜間凍らないようにご注意下さい。もし温度が下がりそうでしたら，ビニールなどで大きく全体をおおい，保温につとめていただきたいと思います。